



## 松

江駅の隣に移転する前、一畑百貨店は県庁や松江城のある殿町にあったのだが、かつてそこに映画館があったことを覚えているのは、ぼくらの年代までだと思う。閉館記念の無料公開を兄と見たのが最後で、記憶が正しければその時頃は小学四年生だったから、もう半世紀以上前のことになる。それまでも何度か行っていて、幼い頃のぼくにとつて映画といえは一畑百貨店だった。いちばん古い記憶は、デイズニーの『メリー・ポピンズ』だ。これは一九六五年の公開だから、四歳で見ていることになる。傘を広げて女の人が空からふわりふわり降りてくるところと煙突が並ぶ前で白い服を着た女のひとくすんだ色の男の人たちが踊っている二つのシーンのみが六十年近くを経ても記憶の中に消えずにある。家に帰ってからもしばらく「チンチュムリ、チンチュムリ、チンチンチュムリ…」と歌っていた。

隣に母がいて、字幕を小声で読んでくれていたのを覚えている。その記憶はいくつか異なる時間が重なっている。『メリー・ポピンズ』以前にも母はぼくを連れて一畑の映画館に来ていたのだと思う。残念ながら、母の読んだ字幕の一節など一切覚えていない。意味もまったくわからなかった。無理もない。映画はぼくに合わせたものではなく、母が観たいものだった。

た。ぼくを一人で家に置いておくわけにもいかず、連れて行くほかなかったのだ。わかるはずもないのに字幕を読み聞かせている母を思うと何だか笑えてくるのだが、そんな言い訳めいたご機嫌取りでも十分効果があったらしく、ぼくは毎回最後まで黙ってスクリーンを見ていた。

少し前、母と同じ年回りの独居老人の手伝いをした。さっぱりとした空気をまとったまま、「もう手術するのも面倒だね。癌なんて切っても切ってもできるしね。」

なんてことを言う人だった。庭にはびこった薔薇の片付けには閉口したけれど、作業していて楽しかった。

「もうどっこにも出られんやになつてしまつて。家で映画見るのが楽しみだね。」

と言うので、ぼくも映画好きだと応じると、「あら、いい映画教えて。」

とねだるような調子で言った。ぼくが車椅子を押し、暗転した映画館の中で胸躍らせている老人の姿が思い浮かんだが、迷ううちに口に出す時を失った。

離れて暮らしている間に、母は認知症を患い、ほどなく逝つてしまった。母が最後に映画館に行ったのはいつだったのだろう。ぼくは、連れて行って字幕を読んでやることなど一度も思いつかなかった。

## 専業ババ奮闘記 (その2)131

## 木幡智恵美

## 迫りくるコロナ (6)

週末も微熱が続き、週が明けても下がらないようなら預かると言っていた実歩は、月曜日の朝に平熱に戻ったとのこと。一応病院で診てもらってから保育園に連れて行くと言う。

我が家周辺のコロナ騒ぎもこれで何とか落ち着いたと思っていたところ、火曜日の朝台所に降りると、お茶がすっかり無くなっている。夜中に息子が三十九度を超える熱を出し、お茶を飲みつくしていたのだ。職場に連絡をすると、すぐに抗体検査を受けるよう言われたと赤い顔で話す。当然私と夫も濃厚接触者ということでは出られない。かかりつけ医で診察してもらい抗体検査キットをもらって帰った息子は、炬燵にはまっぴいびきをかいていた。何とか昼食を摂り、「だるくていけん」と頓服を飲んでまた横になる。午後二時に検体を持って行くことになっている。自力で運転できそうにないと言うので、私の運転で息子を運んだ。以前ホテル宍道湖があったところの向かい側、看護学校の駐車場に検査場があり、車の窓を開けて検体を手渡す。帰って自分の部屋のベッドで横になっていた息子は、四時前に「陰性だつて」と降りて来た。食欲はあり、夕食はいつものように食べたもののいたく難儀そうて、夜中に部屋を覗くと、バスタオルを抱えたままびっしり汗をかいていた。

翌朝は夫が同じかかりつけ医での受診日だったので、息子のことを聞くと、「コロナではない、RSウイルスのような強烈なウイルスに感染したんでしょかね」と言われたとのことだ。RSウイルスといえは、実歩が乳児の頃に罹り、何日も高熱が続いたことがあったやつかいなウイルスだ。息子はその日は終日部屋のベッドの上で過ごしていた。夕食後、「微熱になったから、明日は仕事に行くわ」と言っていたが、

職場からはもう一日休むよう言われたとのこと。明日休めば、大型連休に入る。

連休初日には長男が帰ってくる。娘からは五月二日は児童クラブがお休みで、自分は仕事だから寛大を預かってくれと頼まれている。連休も何かと忙しくなりそうだ。息子はコロナ陰性で済んだけど、長男が他県から帰ってくることで、感染対策は厳重にしなければ。

30代フリーター 布施祐仁というジャーナリストがこんなツイートをしていた。

《某ネット番組で小野寺五典元防衛大臣が「台湾有事」について語っていたが、戦争が始まってしまおうとなかなか決着がつかず長引き、台湾と日本の南西諸島がボロボロになっていくという見通しを示していた。にもかかわらず台湾有事を起こさないための外交の話が皆無だったことに強い違和感》

年金生活者 岸田政権が中国に対して外交らしい外交もせず、敵基地攻撃能力の保有や防衛費の大幅増額に邁進しているのは、どこから見てもアメリカの意向が働いている。「盾ばかりいじってないで、もつと矛を使え。外交？ お前らには百年早い。おれたちがぜんぶ仕切るから、黙って矛を研いでいろ」。そんなホワイトハウスの本音が聞こえてきそう。

30代 中国から見れば、矛を突きつけようとしている日本の姿は過去の侵略戦争の責任も反省も忘れたように見える。自国の軍事力を示すのに、これから国民に国を守る「決意」をしてもいいです、といったような言い方をしているのは、あなどられると考えるのが普通だ。

しかし、日本の場合はそういう言い方ができないことを政府は知っている。何度か紹介したとおり、世界の社会学者らが実施した「世界価値観調査」によると、「もし戦争が起これたら国のために戦うか」との問いへの回答で日本は「はい」が13・2%と、調査対象79カ国中最低（2017年〜20年）だ。つまり大多数の国民は、政府の安保戦略が期待するような「決意」を持ち合わせていない。だから政府が始めようとしている「世論説得」は、出前の注文を受けたあと、食材の栽培や飼育を始めるようなものだ。つまり事実上できないことをしようとしている。

いま日本国民の大多数が「決意」しているのは、戦うことではなく、戦わないことだ。政府の説得くらいでそれ

るに違いない。

年金 日本の戦争責任を問う中国の姿勢が他の多くのアジア諸国にくらべて敵しいのは、日本よりはるかに長い歴史を持つ「帝国」としてのメンツをぶされたことへの怒りがあるからだ。

「帝国」は周辺の国々を「服属国」あるいはそれに準じる国にし、それらを見ればつつかえ棒にして統治を確かなものにしようとする。「帝国」としての中国にとつて、台湾はそうしたつつかえ棒になるべき地域として位置づけられている。「台湾は中国の一部」という言い方は、国民国家の場合のような国民の同質性を想定していない。統一後の台湾は香港のような「一国二制度」を適用すると言っているのは「帝国」ならではのやり方と言える。

「帝国」の統治に欠かせないつつかえ棒としての台湾をかつて日本に併合されたのは、中国にとつて屈辱以外の何ものでもない。それを無視するかのように矛を向けようとする岸田政権には我慢ならないに違いない。だが、背

がくつがえることなどあり得ない。

30代 それでもやるんだらうな。年金 説得（するふり）くらいしないと、せつかく決めた安保戦略のつじつまが合わなくなる。注文してきたアメリカに言い訳もできなくなる。中国に見透かされようが、あなどられようが、やるしかない。

後には巨大なアメリカがいる。できれば無血で台湾の統一を果たしたい。

それを読んでいるアメリカは自国の「抑止力」のすき間を埋めるために、日本に矛をそろえさせ、中国とこれから続く長丁場の「外交」に備えようとしている。岸田文雄はそれにつき従う以外に外交・安保戦略を持ち合わせていない。

30代 布施祐仁はこんなこともツイートしている。《全部政府だけで決めた後には「国民に『決意』要求」って順番が違うでしょ》。昨年12月に閣議決定した国家安全保障戦略に敵基地攻撃能力の保有を盛り込み、「国家としての力の発揮は国民の決意から始まる」と書いたことへの批判だ。政府は国防への「決意」を国民に求めて世論説得に乗り出すと報じられている（1月21日 共同通信）。

年金 どの国の政府でも国防への国民の「決意」を語るときは、たいてい「国民の決意はゆるぎない」といった言い方をするはずだ。世界に向かって

矛はアメリカにまかせ、自らは盾に徹してきたこれまでの専守防衛の安保政策を転換した代償は、「戦わない決意」の持つ、目に見えない抑止力の後退と、軍備の張り子の虎化となつて、これから先あらわになるだろう。

30代 先日の朝日新聞の天声人語は、戦後の日本が戦力の不保持をうたう憲法のもとで、事実上の再軍備をなし崩し的に進め、いま敵基地攻撃能力の保有を計画するまでになつた経緯にふれていた。

年金 日本人が不得手とすることのひとつに普遍性の追求がある。普遍的なものはいつも先進的な大国から与えられてきたからだ。非戦・非武装という高度な普遍性を備えた憲法のもとで軍備の強化がなされてきた背景には、自前の普遍性を持ったことのない歴史がある。それは国家という普遍性を進んで求めようとしないうメンタリティーも育てた。それがいま国家による戦争を忌避する感情として保持され、憲法9条の改変の歯止めとなつている。

ニュース日記 863  
中村 礼治

## 続・岸田軍拡